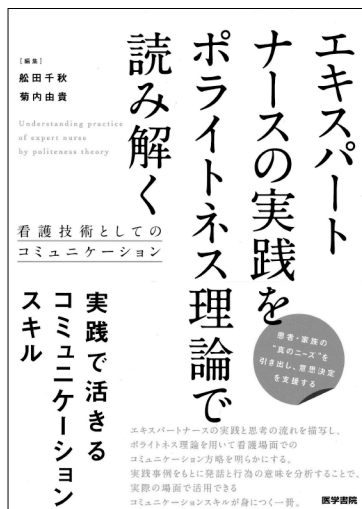




エキスパートナースの実践を ポライトネス理論で読み解く 看護技術としてのコミュニケーション

船田千秋・菊内由貴＝編

本体2800円＋税
医学書院 ☎03-3817-5657

「もつと上手にコミュニケーションをとれるようになりたい」。看護師であれば誰もが望むことである。看護の現場では、初めて出会う患者・家族の価値観や真のニーズを読み解き、援助関係を発展させて健康問題に協働して取り組むために、あらゆる場面で看護コミュニケーションが用いられる。また、専門的な知識・技術を看護実践に落とし込むとき、医師や福祉・介護職などとの職種連携においても、効果的なコミュニケーションを介して初めてその成果が表れてくる。しかし、日々の看護場面でコミュニケーションがうまくいかないと感じる看護師は少なくない。コミュニケーションスキルを高めることは看護専門職としての生涯にわたって学習すべき重要な課題の

ひとつといえる。

看護コミュニケーションの意味を描き出す

本書では、看護コミュニケーションを「ポライトネス」という視点からとらえている。ポライトネスとは、「良好な人間関係をつくるために、さまざまな言語表現によって配慮する」という現象を読み取っていく理論である。この理論によって、看護師が行なう患者への言語的な配慮について分析し、どのようなスキルが用いられているかを明らかにしている。

「理論編」では、ポライトネス理論について概説している。ここでは「基本的欲求（フエイス）」という概念理解が重要となる。人間の基本的欲求として、自分の価値観が他者にとつて好ましいものであつてほしいという欲求「ポジティブ・フエイス」と、自分の自由を邪魔されたくないという欲求「ネガティブ・フエイス」がある。この相反する2つのフエイスを侵害しないように配慮すること（ストラテジー）がポライトネスであるといえる。

「実践編」では、がん患者および家族に対する看護相談16事例について、エキスパートナースと患者・家族の一連のコ

ミュニケーションプロセスをポライトネス理論によって意味づけしている。

具体的には、次のようなシチュエーションが紹介される。

「医師に不信感を抱き、複数の医療機関に相談をもちかける（Case 1）」「寂しさがあり、誰かと話したいと頻繁にたずねてくる（Case 4）」「あなたが決めてくれたらいいわ、という態度を示す（Case 7）」「まだ死ぬわけにはいかない、免疫療法を受けたいと希望する（Case 11）」「子どもががんのことをどのように伝えたらよいか教えてほしいと依頼される（Case 14）」。

現場で役立つ具体的な示唆

このようなやりとりは、現場の看護師であればすでに遭遇している場面であろう。本書はこれらの対応について、ポライトネス理論の枠組みから具体的な示唆を与えてくれる。さらに、普段当たり前にしている挨拶や名前を名乗るといった行為にも重要な意味があることに気づかされる。患者・家族と良好な人間関係をつくり、その意思や価値観を尊重した看護コミュニケーションを行なうために、現場に立つ看護師にぜひ読んでほしい一冊である。